



2021 年 (令和 3 年)
5 月号 (No. 912)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

登山教室指導者養成講習会を開催 今回は山の天気講習を座学と実習で

各支部において登山教室の開設は新入会員獲得の切り札であり、支部山行の運営では、安全確保が大きな命題となっている。それらの指導者養成を目的とした講習会も、10 回目を数えることになった。今回は気象予報士の猪熊隆之会員を招き、気象リスクにいかに対応すべきか、座学と実習を通じて集中的に講義してもらった。

7 支部から 19 名の受講生が参加

支部事業委員会 中村哲也

主催…(公社)日本山岳会 支部事業委員会/後援…(公財)安藤スポーツ・食文化振興財団

4 月 3 日(土)

会場…安藤百福記念自然体験活動指導者養成センター カンファレンス・ホール

◆講義 1 「新型コロナ禍の山岳遭難救助活動」母袋周作講師(長野県)

◆講義 2 「登山指導者向けの気象リスク・マネジメント」猪熊隆之講師(株)ヤマテン代表取締役

◆講義 3 「グループ討議(気象中級演習)」猪熊隆之講師

4 月 4 日(日)

場所…浅間・八ヶ岳パノラマトレイル/蓼科・八ヶ岳展望コース

目次

登山教室指導者養成講習会を開催 今回は山の天気講習を座学と実習で…	1
奄美大島でフリップ殿下をご案内して…	4
運命的な出逢いから中国南西通い…	6
手薄だったシッキム・ヒマラヤを充実…	7
地域発「山の日」レポート⑧四国支部…	8
連載 島の山旅への誘い⑤…	9
新入会員…	12
東西南北…	13
図書紹介…	15
会務報告…	17
ルーム日誌…	18
会員異動…	18
INFORMATION…	18
編集後記…	19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
★新型コロナウイルス感染防止対応のため、当分の間、取扱時間を短縮します。平日 13 時～20 時

◆実技実習「山の天気ライブ授業(観天望気)」猪熊隆之講師

本講習会は 2 月 13 日(土)、14 日(日)開催の予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言発出のため急遽、延期となり開催が危ぶまれた。宣言解除後、開催施設と協議の上、参加人数を制限して感染症対策を施し、例年どおり小諸市で無事開催できた。

講習会は今回で 10 回目の開催となる。今回も安藤財団の後援をいただき、群馬、埼玉、千葉、東京都、神奈川県、越後、山梨の各支部から、37 歳から 73 歳まで幅広く、女性 7 名、男性 12 名、計 19 名が参加した。

日本山岳会の活性化や会員増強の方策として、支部山行が準会員や山歴の浅い会員への定着事業と

して注目されているが、山行の増加に伴い遭難事故の危険も増加している。また、地域の非会員を対象とした登山教室は新入会員の獲得に寄与することから、実施する支部も年々増えている。

その結果、支部活動における問題として指導者の不足を挙げる支部は多い。そこで、支部事業委員会では登山の安全管理に必要な知識を持つ指導者の養成を通して支部の活性化に資するとともに、各地域において登山者が安全な登山ができるよう指導できる人材の育成を目的として、登山教室指導者養成講習会を実施してきた。

1 日目は 3 つの講義を実施した。講義 1 は、母袋副隊長が近年の山岳遭難事例を基に、実際の救助現場の画像を交えて山岳遭難の特徴

を説明され、その原因の多くが人的要因によるもので、特に単独行での遭難が一番多いこと、力量以上の山行による遭難があると示された。また、コロナウイルス感染の疑いがあるとき、防護服を着用した救助活動はかなり難しくなると話された。

講義2は、猪熊気象予報士による「登山指導者向けの気象リスク・マネジメント」の講習で、山の天気の基本から気象遭難で最も多い低体温症事故例を天気図から考察し、天候悪化時の地形に関わるリスクまで学んだ。

講義3は、気象中級演習として実際にあった気象遭難の事例を基に設問があり、2班に分かれてグ

出張「山の天気ライブ授業」を受付中

猪熊隆之

新型コロナウイルスは収まる気配を見せず、先が見えない状況ではあったが、登山教室指導者養成講習会で「山の天気ライブ授業」を実施することを決定していただき、

4月3日(土)、4日(日)の2日間、小諸市の安藤百福センターで開催された。コロナ対策のために、セン

ターの定員が通常より少なくなっ

ループ討議し発表する、とても有意義な演習だった。
2日目、実地講習「山の天気ライブ授業」は、トレイル上で行なわれた。当日の天気は悪化傾向だったため講習には条件が良く、特徴的な形状の雲が確認でき、実際に雲の流れの向きや風向きをコンパスで確認した。

今回の講習会では多くの支部から参加があり、安全登山について学習し、考える貴重な機会を持つことができた。各支部において今回学んだことを深め、安全登山に対する取り組みを行なうきっかけとなり、支部山行や登山教室が適切な安全管理の下で行なわれることを願っている。

たことから会場での受講生は20名に限定し、会場に来られなかった受講希望者に対しては、オンラインでの講義を行なうハイブリッド方式を採った。

講義は、「どうして天気予報を利用するだけではダメなのか？」から始まり、山と平地との天気の違い、低体温症の遭難事例から学

ぶべきこと、さらには地形から読み取れる気象のリスクなどを説明した。

夕食後は、梅池自然園から白馬岳に登頂するという設定で、用意された天気図や地形図から、具体的な気象リスクの想定とその回避方法について、2つのグループに分かれて議論を深めてもらった。

さすがに各支部の指導者候補だけあつて活発な議論が行なわれ、それぞれのグループからは、気象遭難を防ぐためのいろいろな考えが披露された。このようなグループワークにおいては、ほかの参加者がどのように登山計画を立て、リスク・マネジメントを行なっているのかなど、いろいろな意見を交換できることから、講師が一方的に回答を押し付けるより、学習効果が上がることが期待できる。そもそも登山における気象判断やリスク・マネジメントは、正解が一つということはないから、いろいろな意見が出ることは望ましい。そういう意味でも、有意義なグループワークになったと思う。

2日目は、「山の天気ライブ授業」。当日は日本海から前線が次第に南下し、天気が崩れていく空模



映像を交えて遭難の実態を講演した山岳遭難救助隊の母袋副隊長

様であつた。天気が崩れる典型的なパターンであり、悪天に伴って現われる雲について解説することができた。このような天気を与えてくれた空に感謝したい。

南側を広く見渡せる高台からは、八ヶ岳、奥秩父、車山、美ヶ原などが見渡せ、その間の谷を吹いて来る風や、湿った空気の流れ、山が天気と与える影響などを、雲の変化や動きを見ながら解説していった。残念ながら、こちらは技術的な問題で、オンラインでのライブ授業は行なえなかったが、今後、オンラインでの可能性も探していきたい。また、この授業のダイジェスト版を動画にして、YouTube



フィールドで空を見ながら解説する猪熊講師(左から2人目)

や日本山岳会のホームページなどから配信する予定である。

今後は、コロナの状況次第になると思うが、登山における気象リスク・マネジメント、あるいは観天望気技術の習得のために、各支部で開催をご検討いただきたい。各支部自慢の山で空を見上げ、

充実の指導者講習会を受講して

雲談義をしながら皆様と楽しく山を登れば、と思っている。
なお、本年1月に上梓した拙著『山の観天望気』（山と溪谷社刊、1100円〈税込〉）も参考にしていただければ幸いである。
（気象予報士、株やマテン代表取締役）

神奈川支部 石川千嘉

もともと日本山岳会への入会動機は、会社のハイキング・クラブを引っ張るに当たり、きちんとした知識や技術を身につけたいというのが目的だった。今回の講師のひとりが、山岳気象予報の第一人

者である猪熊隆之氏だったということも非常に魅力的だった。

初日、まず長野県警察山岳遭難救助隊の母袋副隊長から、具体的な事例を交えた遭難救助についての講義をいただく。コロナ下で登山者は減少したものの単独登山者の割合は増加し、遭難といったリスクも高まっていること、また、感染防止を徹底しながらの救助は大変困難なものであるということを伺い、改めて新しい状況下での登山のあり方ということを考えるきっかけとなった。

続いて猪熊氏による座学の気象リスク・マネジメントについて。分かりやすく魅力的な語り口は、重要であれどなかなか身に付きづらい天気図の読み方もすんなり理

解できるもので、かつ実践的な内容だったので、翌日のライブ授業への期待がさらに高まる。

残念ながらコロナ対策として懇親会は開催されなかったが、その代わり天気図と地図を見ながら、気象リスクを考慮した登山計画を立てるというグループ討議を行なった。参加者の方々はいずれも私よりはるかにベテランであり、どこで撤退の判断をするか等々、ああ、そういう視点もあるのだという新たな気付きを得られる良い機会であった。

翌日、どんよりとした空模様の中、浅間・八ヶ岳パノラマトレイルを歩きながらの解説というライブ授業が行なわれた。普通であれば「ああ、晴れてほしい」「雨が降りそうで残念」ということになるかもしれないが、今回は観天望気の授業。むしろ怪しい天気の方が勉強になる。猪熊氏の後に続いて歩き、雲の様子や風の様子を肌で感じ、座学で習ったことを思い出しながら空に目を向ける。

上空では雲の動きと予想天気図から北の風、しかし、肌で感じているのは南からの風。これはなぜかという質問をしたところ、現在立

っている位置は南側が開けたコの字型をした丘で囲まれた場所、風はこの地形の影響を受けて上空と違った感じ方をするという回答。考えれば分かることかもしれないが、それは正に「目からうろこ」であった。

天候は天気図だけではなく、地形の影響も受ける。まして山の天気はそれ以上に地形の影響が大きい。ネットに上がっている天気予報を鵜呑みにするのはなく、そういった条件をきちんと把握した上で、自分で判断できるようにしなければならぬ。桜は五分咲き、春の花が開き始め、のどかで穏やかなトレイルを歩きながら、私は猪熊氏の講義に鳥肌立っていた。

充実したライブ授業はあつという間に2時間が過ぎ、まとめの座学を行なって解散となった。小雨がぱらつき始めるなか、私は車のハンドルを握りながら、これまでと少しだけ違った目線で空模様を眺めながら、帰路についた。

改めてこの場をお借りして、講師の方々、参加者の方々および企画・運営いただいた関係各位にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

REMEMBRANCE

奄美大島でフィリップ殿下をご案内して

千葉支部 安間繁樹

4月9日、フィリップ殿下が逝去された。イギリス・エリザベス女王の夫君エジンバラ公である。殿下は1961年、WWF（世界自然保護基金）の初代総裁に就任、晩年は名誉総裁として生涯を世界の自然保護に尽力された。

1984年、私は殿下を奄美大島へご案内し、3日間をともに過ごしたことがあった。当時、私（39歳）はWWF日本委員会に在籍し、「南西諸島保全プロジェクト」を進めていた。その間、プロジェクトをアピールしたいと考え、殿下の奄美大島訪問を企画した。もちろん、WWF日本委員会事務局の後ろ盾があつてのことだ。

まずはルリカケスがお出迎え

10月14日、フィリップ殿下と我々は、奄美空港に到着した。空港では歓迎一色、保育園児からお年寄りまでが、WWFのパンダ旗を振りながら迎えてくれた。

明けて15日、午前8時半、バスにてホテルを出発、一路、住



展望台から住用川のマングローブ林を見下ろし、殿下に説明する筆者(右)『野生生物』WWF-Japan, No107, 1984より

用川^{よう}に向かう。南国にも秋の気配が感じられる。ススキの穂が揺れ、野生のハイビスカスであるフヨウが咲いている。フヨウは秋から冬の間に花を着ける樹木だ。ナガサキアゲハ、ツマベニチョウが飛び、10月も半ばというのにセミが鳴いていた。オオシマゼミ、クロイワツクツクはツクツクホウシの仲間だ、この地域に固有の種である。

この日はルリカケスが実に多く見られた。最初の1羽は名瀬市（現・奄美市）を出て10分もたたないときだった。バスのすぐ上を横切ったルリカケスは道路わきの木に止まり、殿下を歓迎しているようにもあつた。朝陽に映えてルリ色とクリ色の翼が大変美しい。しばし停車したバスから、殿下も満足げに観察されていた。当時の道はほとんど未舗装。トンネルもなく、住用川へ行くのに大きな峠を3つも越えた。それでも殿下は最前列の席に座り、胸に下げた双眼鏡を右手でしっかりと握り、鳥はいないかと全神経を外に向けられていた。

住用川のマングローブは、ちょうど満潮時。メヒルギ、オヒルギはさながら浮かべる森といったふう

で、川幅もずっと広く見えた。小型ボートで繰り出した殿下を、まず迎えたものはミサゴであつた。頭上を低く2回、3回と旋回する。「オスプレイ（ミサゴ）だ」いち早く叫んだ後、ほかにもないかと双眼鏡で鳥を探されていた。

マングローブを後に湯湾岳^{ゆわん}へ向かう。道はしばらく役勝川^{やくかつ}に沿って上っていく。全く汚れていない流れとヘゴ、リュウビンタイ、タケが茂る渓流域。そこでは窓をいっぱいに開け、奄美の空気を満喫されていた。「ヘゴはニュージールランドで見たことがある」と、南極大陸と南太平洋訪問の思い出を話してくださった。

湯湾岳は標高694m、奄美大島の最高峰である。展望台からは太平洋、東シナ海が一望に見渡せる。足下に広がる樹林も鮮やかな緑色だ。記念植樹にはイジユが用意されていた。琉球列島に自生するツバキ科の樹木である。吹き上げてくる快い風を受けての昼食。宇検村^{うけん}が殿下のために準備してくれた、心づくしのバーベキューである。

「少し歩きたい」。やがて出発の時刻というとき、突然、殿下が山

道を登り出した。驚いたのは警備の人たち。しかし、私は止めなかった。ただ、万一ハブが出たときのことを考え、先へ先へと目を配り、狭い山道を並んで歩いた。

午後は、日本から南方へ渡るサシバが至る所で観察できたし、ズアカアオバト、ルリカケスを見ることができた。殿下は、観察できた鳥をノートにリストアップされていた。金作原自然観察路ではヘゴの群落を、名瀬港沖ではグラスボートでサンゴを観察した。

夜の動物観察に出発

夕方、1時間の休息と食事の後、再び山へ。殿下のほか元ダーウィーン研究所所長のペーター・クライマー博士も同行した。夜活動する動物を林道上で観察するためである。お目当てはアマミノクロウサギ。ほかにもアマミヤマシギや固有のヘビやカエルを見ることができるかもしれない。いち早く相手を見付け、驚かさないように車を止め、そして観察する。そのためには、運転手は私でなければならなかった。途中、かなりの雨が降った。ふたりは多少心配な様子だったが、私は内心喜んでいた。じ

きにやんでくれれば申し分ない。動物の多くは雨の直後に活発に動き回るからだ。だが、行けども行けどもクロウサギは出ない。今日はコースも時間も限られている。万一会えなかったら……。不安な気持ちが増えた。だから、初めてオットンガエルを見付けたとき、私は車を止め、このカエルが世界中で奄美大島にしかないこと、大変おもしろい種類であることを、とくと説明した。

13頭ものクロウサギが歓迎

片道2時間の道をすでに1時間も進んだ。今夜は見られないかもしれない。そんな不安が一層つのってきたとき、はるか前方の道



アマミノクロウサギ。夜行性。特別天然記念物

のわきに、ライトに照らされて灰色っぽい固まりがボーツと見えた。「クロウサギだ私はそう直感した。一層スピードを落として静かに近付く。あと10m。私はそこでエンジン止めた。クロウサギは驚いた様子もなく、ゆっくり移動している。そして道から外れ、やがて草むらに消えた。「耳が短いんだね。思ったより毛がふさふさしているなあ。びっくりした様子もなかったね」と殿下。アマミノクロウサギを殿下に見てもらったことができ、私はホッとした気持ちであった。2頭目との遭遇は5分後。道の中央におり、さらにゆっくり観察できた。「2頭は生息していると報告できるよ」と、殿下からは



アマミヤマシギ。昼夜ともに活動

冗談も出始めた。それからが大変。これでもか、これでもかと出てきたのである。そして、どの個体も車に驚くこともなく、我々はゆっくりと充分に観察できたのである。ルビー色に光る目も素敵だ。およそウサギらしくない跳び方も愛らしい。それにしても、一晩のうちにクロウサギを13頭も見られたのは、私にとっても初めてのことであった。

そのほかにもアマミヤマシギ、アカマタ、ハナサギガエル、それにケナガネズミまで出てきた。殿下は最高に満足された様子であった。その証拠に4時間のナイト・ドライブ中、自然に関する話が途絶えることがなかった。



アマミゲネズミ。夜行性。天然記念物

著者、自著を語る

運命的な出逢いから中国南西通い

中村 保

人生の転機は偶然やつて来る。

三部作もその結果と言えるよう。30年前、未解放地域だった雲南省の麗峰・玉龍雪山を目にしたことが引き金となり、中国南西通いが始まった。東チベット・四川・雲南・青海の広大で複雑な、知られざる山域を体系的に踏査し、45回も足を運ぶこととなった。会社人生と二毛作である。

2016年1月に『ヒマラヤの東 山岳地図帳』、19年5月に『ヒマラヤ越え空撮写真集』、21年4月に『未踏峰と三江併流』を出版、

三部作が完結した。人との邂逅が進路に大きく影響する。一橋大山岳部の長老・故吉沢一郎先輩との出会いがそうである。

ヒマラヤの東―チベットのアルプスとの縁は、ニュージールランドでの苦難のプロジェクトの後、IHI香港法人の社長を務めていたお陰である。1990年に当時、未解放地域だった雲南省の秀峰・玉龍雪山に出かけたことが引き金で、中国南西通いが始まった。大袈裟に言えば、運命的な出逢いである。踏査の旅の回を重ねることに引き込まれていった。東チベット・四川・雲南に広がる「ヒマラヤの東」の広大で複雑な、未踏の山域に体系的に取り組んできた先人は誰もいないことが分かってきた。自分が先駆者になろうという気負いが生まれ、今日まで45回も足を運び続けることとなった。『ヒマラヤの東』、『深い浸食の国』、『チベットのアルプス』をすでに山と溪谷社から出版している。

大陸移動説によると、1億50

00万年前にゴンドワナ大陸から分裂した陸地が、その後北上を続け、約5000万年前にユーラシア大陸と衝突して現在のインド亜大陸ができた。そのときに大褶曲山脈ヒマラヤが形成され、チベット高原が造られ、衝突したときに地層の変形が最も激しく、地塊がゆがん

だのがヒマラヤの東・横断山脈である。

チベット高原に源を持つ5つのアジアの大河が、わずか165kmの間で互いに接して、南北に流れる特異な地形が造られた。それぞれの河口は数千kmも離れている。5つの大河―揚子江（長江）、メコン（瀾滄江）、サルウィン（怒江）、イラワジ、ツアンポー・ブラマプトラーの上流、支流あるいは源流部が揚子江上流部の金沙江まで、互いに20〜30kmの間隔で南に流れ、天嶮の要害を形成し、東西の交通を遮断している。峡谷から山嶺の標高差3000〜5000m、分水嶺は高く峡谷は深い。

チベット高原の東端、ヤルン・ツアンポーが大屈曲点で世界最大の峡谷となり、ヒマラヤ山脈東端



東京新宿・紀伊國屋書店のディスプレイ

の秘峰・ナムチャバルワ（7782m）を抱え込むようにして流れを南に変える。チベットのアルプスとヒマラヤの東の山域は、念青唐古拉山東部から横断山脈の東縁まで、無数の6000mの未踏峰が存在する。信じがたいほどの複雑な地形が、この山域を特徴付けている。

現在、中国は猛スピードで開発・インフラ整備が進められ、青海チベット高原は「もはや辺境ではない」とはいえ、幹線道路から外れると、手付かずの氷河を抱く鋭峰が無数に存在する。それらは、これからも長く不可解な山域として残るであろう。知られざる未踏峰と氷河が最も集中している念青唐古拉山東部、易貢蔵布の北側は、今日でも「テラ・インコグニタ（未知の世界）」である。



『未踏峰と三江併流』の書影

編集長、新著を語る

手薄だったシッキム・ヒマラヤを充実

東海支部 沖 允人

日本山岳会東海支部では、1988年から鈴木常夫が中心となってインド・ヒマラヤに毎年のように登山隊を派遣し、成果を得ていた。当時の日本山岳会会長の尾上昇が東海支部所属であったことから、日本山岳会創立110周年記念出版の一冊として『インド・ヒマラヤ』を東海支部がまとめ、創立記念の年次晩餐会に間に合うように出版することとなった。

インド・ヒマラヤの14の山域から選定した山の解説(位置と概要・登山略史・文献・概念図・山の写真)をし、各山域の日本隊の記録を数座載せるという構想であった。インド人3名も含む約40名の各山域の精通者に原稿を依頼し、執筆を開始した。本部の編集者・神長

幹雄会員の協力も仰いでなんとか本がまとまる段階になった。ところが、中心人物であった鈴木常夫が病に倒れるという不幸が起こった。

東海支部員の編集委員が後を引き継いで、印刷所(名古屋・浅井隆文社)にも相当な無理をしてもいい、なんとか期日に間に合わせ、出版・販売は京都のナカニシヤ出版で引き受けてもらった。予想されたことであつたが、拙速な刊行計画と編集者の不慣れの所為で多くの誤りがあり、16ページもの正誤表を作成しなければならなかった。

類書がなかったこともあり、一応の評価は得られたが、このままにしておくのは出版社・編集者として責任があると考えて、手薄だったシッキム・ヒマラヤを充実し、その後、注目されてきた東カラコルムのドングドー谷やザンスカールのムルング谷の山々などを追加し、改訂・増補版を発行することになった。本来ならナカニシヤ出版

にお願ひすべきであるが、先代代表者が他界され、山の本の出版に重きを置かないということから、名古屋の風媒社に採算を度外視して印刷・出版を引き受けていただいた。

編集に関わる者は数人になつてしまつたが、鋭意努力した。初版の675ページより67ページ増えて、総ページ数は732ページとなった。この種の本を継続して購入してもらえらる読者はあまりないと予想して、100部印刷することにした。定価の1万5000円は安くはないが、それでも出版費用の半分ほどである。2015年12月から6年過ぎた21年4月に、東海支部創立60周年記念として発行できた。

カバのカラー原画版は、東北大学医学部良峻会によるシッキム・ヒマラヤのシニオルチュー(6887m)とし、どちらも杉田博会



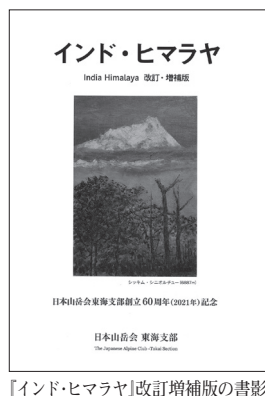
シニオルチュー北面のシニオルチュー氷河のアイスフォール
撮影＝保坂正美

員による油絵である。

改訂・増補版の編集者として一応肩の荷を降ろすことができた。しかし、費用の関係から専門の校閲者・編集者を依頼できなかったこともあり、すでにいくつかの間違ひが見付かっている。後に続く人が、版を重ねてくれることを期待したい。

なお、引き続き英語版『Indian Himalaya-An Illustrated Guide for Mountaineers』を来年秋に出版予定である。定価8000円、予約特価5000円。

改訂増補版、英語版ともに問合せ・申込みは東海支部・星一男(E-mail:khoshi@katch.ne.jp)へ。
『インド・ヒマラヤ』改訂・増補版編集長



『インド・ヒマラヤ』改訂増補版の書影

地域発「山の日」レポート⑧四国支部

「山の日」定着後も重い私たちの役割

四国支部長 尾野益大

「山の日」が、国民の祝日という現実到大分慣れた。その日が来るたび、自分の趣味が世間に認められているという、気恥ずかしさのような感情も少しはある。

「今日はなんの日？」ではないが、なんとかの日は多数あるにせよ、国民の祝日は限られているのだから

ら、自分の趣味が祝日と重なるのは、冷静に考えると奇跡のような話ではないか。実に重大だ。

ただ、私たちはすでに「山の日」だから山に親しむ人種ではない。山の日はなくても、山にしようちゅう登って山に親しんでいる。知らず知らずのうち、山が出てくる本や雑誌、写真集、地図を開いてしまおうし、テレビの山番組を探してみよう。

たまにしか登らなくなつた元登山家も毎日、何分間か、何時間かはよき山の思い出を頭に浮かべているのではないか。これが、山を知ってしまった人の性だと思ふ。

アフリカで人類が生まれ、サバンナに出るまで森林の樹上にいた事実を考えれば、ごく当たり前のことかもしれないのだが……。

「山の日」の一番大きな

意味は、普段、山登りとは無縁に過ぐす人々に日本が山国であり、知る知らないを問わず山の恩恵を受けて暮らしている現実に気付いてもらう点にある。濾過された清い水や酸素の供給源を挙げるまでもなく、山は人間の命と営みに強い影響を与えているのだから。

四国支部も年一度、「山の日」をPRする活動をしてきた。西日本第2の高峰・剣山での植物観察会や講演会、高松市中央図書館での山岳書の特別陳列などだ。

あえて「山の日」を前面に押し出してはいないものの、本部主催、四国支部が主管する小島鳥水祭も山のPRに役立っているはずだ。

「山の日のため」と明確に銘打たなくとも、「山の日」の趣旨にかなっていると思ふ。

カレンダーを見ずに年間の祝日を全て言える人はすごいと思つていたが、我が趣味を祝う日が含まれると、海の日や体育の日に代わつてできたスポーツの日の存在を改めて教えられ、海を思い、スポーツを思う。逆に言えば、私たちが山の日に何もせずに放っておけば、8月11日がなんの日だったかと、世間から忘れられる可能性が

ある。ただ、今年はオリンピック閉会日の8月8日に移動する特例が認められている。

日本山岳会、あるいは会員が活動するだけで、実は「山の日」の啓発になっていると思うが、普及と定着にはもう少しばかり時間を要するに違いない。しかし、定着した後にも山に親しむ私たちの役割は重い。「山の日」を認めてもらうのがゴールではないと考えるからだ。

山の日協議会の会員に所属して配られた設立趣意書を読み直すと、山に関する問題が列挙されている。山林の荒廃、良質な水資源の確保、動植物保護、遭難事故対策などで、将来にわたっても課題は尽きない。



高松市中央図書館での山岳書の特別陳列



剣山で行なわれた「山の日」記念登山

連載■島の山旅への誘い⑤

利尻・礼文島

— 利尻山(鴛泊コース／杓形コース)、礼文岳、
8時間コースなど

利尻・礼文島の山概説

北海道最北の町・稚内(わっか内)の西方、利尻水道を挟んで20kmの日本海に浮かぶ利尻島は周囲約63kmの楕円形の島で、島の中心に標高1721mの利尻山が鎮座する。天敵となる野生動物が少ないため多くの海鳥や野鳥たちが飛来し、花と鳥を楽しむことができる最北の日本百名山である。

円錐形をした開析(かいせき)コニーデ火山



鴛泊港沖合のフェリー船上から見た利尻山北面

工藤嘉高

の利尻山を中心として麓に原生林を抱え、そこから雨水や雪解け水が海に流れ出ることで養分豊かな海が育ち、栄養を蓄えた良質な「利尻昆布」など海藻が育つ。この昆布を主食とする海の名産の一つにエゾバフンウニやキタムラサキウニがある。

利尻山の登山は厳冬のスキーを除くと、雪解けする6月半ばごろから雪が降る9月初めぐらいまでが登山シーズンとなる。現在のアプローチは、鴛泊港(おしどまり)の近くにある利尻北麓野営場から登る鴛泊コースと、利尻町森林公園を車で登り、見返台園地から登る杓形(がた)コースの2コースがある。鴛泊コースは比較的小アプローチしやすく人気の高いコースであるが、途中に宿泊できる場所もないため往復約12kmのロングコースとなり、1日で往復しなければならぬので覚悟が要る。

一方、利尻島と併せて人気の高

い日本最北の有人島(北方領土を除く)の礼文島は、「利尻礼文サロベツ国立公園」の中にあり、稚内から西約60kmに位置する。

この島には約300種の高山植物が咲き競い、「花の浮き島」と呼ばれている。シーズンには、礼文島固有種であるレブンアツモリソウやレブンキンバイソウ、レブンウスユキソウなど、島の名前が付いた花々と出会えることだろう。ウエブサイトの「れぶん花図鑑」で下山後、見返すのも楽しい。

島内には、島の最高峰・礼文岳への登山を含め7本のフットパス(遊歩道)がある。礼文島の北端、スコトン岬の沖合にある小さな無人島・海驢島を眺め、レブンアツモリソウを愛でる岬巡りコース、久種湖畔を巡るコース、夏の涼みに良い礼文滝コース、レブンウスユキノソウの群生が楽しめる礼文林道コース、島に咲くほとんどの花と利尻山を眺められる桃岩展望コース、後述する「8時間コース」など、天候・体力・時間に応じて選択して楽しむことができる。

主な山の登山ガイド

▲利尻山・鴛泊コース



利尻山北峰山頂から見た南峰とローソク岩

鴛泊港から歩を進めると利尻富士温泉、自然休養林分岐を経て1時間半ほどで北麓野営場に到着する。利尻山の標高は1721m、北麓野営場の登山口は約200m。高低差1521mの山旅がスタートする。野営場を15分ほど歩くとボン山と姫沼へ向かう探勝路と利尻山へ向かう登山道の分岐に出る。山頂への道は分岐を左に進む。

途中、三合目には「日本名水百選」に選ばれている名水で、利尻山唯一の水場「甘露泉水」がある。ここから先は水場がないので、十分補給することをお勧めする。

五合目まではエゾマツやトドマツの大木の森の中をひたすら登る。

分岐から1時間40分ほどで六合目に当たる第1見晴台に到着する。ここから先は視界が開けるとともに登山道の足元も変化し、八合目の長官山(1218m)まではゴロゴロ石の登りとなる。ここから通称「七曲り」と呼ばれるジグザグ道が7つ続き傾斜がきつくなるが、ゆっくり進むと利尻山山頂部の絶景が待っている。10分ほど先に避難小屋があり、そこから35分ほどで九合目に至る。

「ここからが正念場」という看板があり、山頂が見えているのになかなかたどり着かない最後の登り



となる。このルート沿いでは危険な崩落箇所も多くなってくるので注意が必要である。約5〜6時間のアルバイトのご褒美は、周囲が海に囲まれた島の山ならではの大きなパノラマである。

利尻山の最

高峰は南峰で、北峰(1719m)より2mほど標高が高いのだが、現在は立ち入り禁止となっているので、北峰が現実的な利尻山の山頂となる。山頂からの景色は、南側には南峰と「ローソク岩」が屹立し、西側は杓形方面、北側は礼文島を望むことができる。山頂にある祠に安全祈願をし、帰路につくと良いだろう。

山頂往復の平均所要時間は約10〜12時間(登り約5〜6時間、下り約3〜4時間)。

▲利尻山・杓形コース

もう一つは、島の西側から登る

杓形コースである。このコースは鴛泊コースより短いが危険箇所が多く、上級者向けとなっている。

登山口は公園駐車場の道路沿いからアプローチする。トイレなどはあるが、水場がないので事前に準備を怠らないように注意が必要だ。1時間ほど進むとすぐに六合目となり、標高約650mの五葉の坂あたりから森林限界を越え、ハイマツが姿を現わす。この先に見晴台があり、避難小屋、狍犬の坂、夜明かしの坂、そして、景観の良い稜線ルートとなる馬の背など、急登と平坦な場所が交互に現われる。雄大な景色を楽しみながら進むのにちょうど良い。

八・五合目あたりからはお花畑が姿を見せ、道端に咲くミソガワソウやリシリアザミ、リシリブシボタンキンバイなど固有種を楽しむことができる。この間に2ヶ所トイレブースがあるので、携帯トイレを準備しておきたい。

この杓形コースの難関は、鴛泊コースとの合流点までにある「親不知子不知」であろう。足元がズルズルと滑りやすいので、導線ロープに沿って、飛び石などを使いながら慎重に登ってほしい。ここを



一面のお花畑がハイカーを楽しませてくれる桃岩展望コース

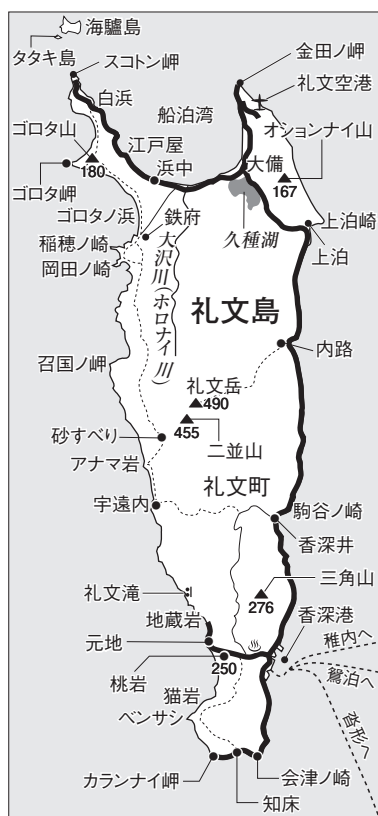
抜けると合流点となり、鴛泊コースをたどって山頂に至る。

杓形コースは標高差約1280mあり、登りで約6時間、下りで4時間ほどかかると想定してプランニングされると良い

▲礼文島・8時間コース

ここで紹介するのは、礼文島の西側を縦断する「8時間コース」と、島の東側に位置する内路から登る礼文岳コース。

8時間コースは、船泊湾に面した浜中からスタートし、西上泊地域までは「岬コース」と同じルートをたどる。ここから島の内部に進んで木々に囲まれた道を南下し、途中から「砂すべり」と呼ばれる



▲礼文島・礼文岳

もう一つは礼文岳コース。礼文

急な下り坂をたどって海岸に向かう。海岸に出ると大きなゴツゴツした岩が並ぶ、道とは言えないようなルートを通って宇遠内に至る。かつてはそのまま海岸線歩き、何ヶ所もの鎖場を経ているが、日没に間に合わないハイカーもいるので、2014年からルートが変更され、東へ向かって香深井へ出るルートとなっている。

島内の最高峰で、標高490m。往復約3時間のルートは、島東部にある内路地区からのアプローチで、香深港から約30分で登山口に至る。このパーキング近くに公衆トイレがあるので、事前準備をお勧めする。

山頂を目指す片道約4・5kmの道は、つづら折りの急な登りから始まる。5分ほどで海を見下ろせ、お花畑にいやされながら山頂を目指す。途中にある森を通り抜けると再び視界が開け、天気が良いと利尻山や偽ピークが見える。この標高は約400m。そこからハイマツ帯が続き山頂に至る。周辺には高い木々がなく、晴れていれば360度のパノラマを見ることができよう。

古い地図には現在廃道になった

ルートが載っている場合があるので、最新の地図で登ることをお勧めする。また、礼文島のフットパス7コースのうち一部のルートは、豪雨災害のため通行止めになっているので、礼文観光協会などへ事前の確認が必要である。

山旅のメモ

利尻島へのアクセスは飛行機とフェリーの2つがある。飛行機は札幌の丘珠空港から50分、フェリーは稚内から1時間40分で鶴泊港に到着する。礼文島へのアクセスは稚内から1時間55分で香深港へ。また、利尻島の鶴泊港・杵形港から香深港へは、フェリーが40分で運航している。

なお、花のシーズンの利尻・礼文島は多くの登山者や観光客でにぎわうが、次の約束事だけは必ず守っていただきたい。(1)利尻山では自然環境保護のため、携帯トイレを利用する運動を推進している。トイレブースは通常、鶴泊コースは六合目・八合目・九合目の3ヶ所、杵形コースは2ヶ所に設置されている。携帯トイレは利尻島内のコンビニや宿泊施設にて販売しているので、忘れずに購入するこ



スコトン岬の展望台から遠望した海驢島

(北海道支部会員

と(1個400円)。(2)登山道保護のため、ストックには必ずゴムキヤップを付けること。(3)植物の上に座らない、踏み込まないこと。

利尻・礼文島は、最北の離島という厳しい環境ゆえに守られた自然である。周囲が海で囲まれているため山頂付近の天候変化が大きいので、荒天時や滑りやすい箇所などでは注意が必要である。

いずれにしても、ピーク・ハンティングだけに固執せず、ローカルな食文化やアクティビティ(トレッキングやサイクリング)など、離島ならではの時の流れも楽しんでほしい。

東 西 南 北

N

S

「山岳古道」奥秩父十文字峠、三国峠を歩いた先人

小原茂延

創立120周年記念事業の一環である「山岳古道」を歩くプロジェクトを知り、その広大なプランに郷愁とロマンを抱くとともに歴史の脈々たる流れを知りたいものと考え、支部の古道推薦・探索に参加することになった。

令和3年が明けても新型コロナウイルスの勢いが強まる中、支部のプロジェクト・チームは資料調査も当面は個人ワークに終始しながらメールで情報を共有し、山を知る人は峠や街道に通じているので古道への認識は高まってきた。近代登山以降に奥秩父登山で広く知られているのは木暮理太郎、田部重治、中村清太郎らによる奥秩父開拓時代の記録、紀行文であり、「秩父の王

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

子」と言われた原全教の研究も知られている。しかし、それらとは別に明治の早期に武蔵の国から十文字峠越えをして信州へ入った紀行文、また時代は下がつて昭和の戦前、物資窮乏の折に三国峠越えをした紀行文も書かれていた。

お雇い外国人である英国人ロバート・ウィリアム・アトキンソンが明治12（1879）年夏に、友人のディクソン教授と中沢岩太（注：アトキンソンの弟子、のちに工学博士）を同行者として八ヶ岳から白山、そして立山に至る山旅を明治13年2月発行の「日本アジア協会会報」に「八ヶ岳・白山・立山」紀行として発表していると、秩父地域に在住のM会員がこの文献の訳書を探し出し提供してくれたので一読、目を瞠（み）った。支部として推薦している十文字峠道が八ヶ岳へのルートとして取られているのを奇異に思ったが、アトキンソンが

寄附金および助成金などの受入報告

(令和3年3月31日まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、その他
石川 春 様	30	登山道・山小屋等の整備費用
藤本 三樹雄 会員	20	日本山岳会運営費用
三井 賢治 会員	100	マウンテンカルチャークラブ(MCC)運営費 および全国山岳古道調査事業費
JAC01会	18	日本山岳会運営費用
京王電鉄株式会社	1,000	高尾の森づくりの会運営費用
少額寄附者1名	1	日本山岳会運営費用
越後支部会員 他14名	115	高頭仁兵衛翁寿像 碑修復募金

(別紙) 高頭仁兵衛翁寿像碑修復募金受入報告

(順不同、敬称略)

3万円	脇屋雄介
1万円	菰澤庸昭、川崎吉明、土田公一、齊陽
(1万円未満9名の氏名省略)	

書いている当初計画が「武蔵の国を西方に向かってまっすぐ突っ切り、直接、信州の国に入る……以下略」であり、まず川越を目指し大井宿に、ここで近道を聴くに及んで黒須、飯能、坂石、正丸峠越えで秩父に入っている。さらに荒川上流の賛（え）川村の美を賞してイソダ屋に泊まり、行く先の地図を見せてもらってスケッチ（添付あり）し、アトキンソン一行は落合から栃本を経て十文字峠を越えるルートをとって梓山に下って八ヶ岳を目指した。その後さらに白山、立山への長旅が続けているのには当時の交通事情を思えば驚嘆に値す

る。なお、この記録は『日本山岳会百年史』の年表に「八ヶ岳、白山、立山に登頂」と明記されている。

さて、はるか後年の昭和13年の正月厳冬期に、秩父から信州梓山へ越すのに三国峠を目指したのが画家で登山家、本会の役員として会務にも尽力し、終戦の前年に穂高の白出沢に消息を絶った茨木猪之吉画伯である。彼の著書『山旅の素描』（昭和15年、三省堂）に「厳冬の奥秩父」の一篇がある。東京での年頭挨拶もそこそこ三峰口よりバスで大輪に着き、「いつもながら、この街道は錆があつてよろしい。……」などと落合を経て鶴

平の先で泊まり、翌朝、土地の小
学生にキャンパスを持ってもらつた
と素直に喜びながら中双里に達し、
「槍ガ岳」(注：秩父槍岳と称する
岩山を描き、中津川の幸島家に一
泊して「ここからなお奥深く三国
峠越し、信濃沢で雪も深く凍つて
尾根の登り口ですこぶる困難し」
云々とある。

次の一篇「冬の三国峠」では、中
津川村を後に勇んで峠を目指した
ものの、雪深い溪谷に道を失い難
渋して引き返し、老爺と病の青年
の住む家に宿を求めた。その老爺
が明日、信州の娘の所に用事があ
るので一緒に行こうと言つてくれ
たのでひと安心して泊まり、道案
内を得てなんとか峠越えをしてた
どり着いたと、厳しかった秩父か
ら信州梓山への山旅を書いている。
二者の峠越えは、時代の違いも
あるが、当時の峠越えの厳しさを
色濃く伝えている。

ウェストン祭今昔

古幡開太郎

ウォルター・ウェストン師は、
1888(明治21)年、英国国教会



第74回ウェストン祭(参加者による献花)

伝導協会の宣教師として日本に派
遣された。2回、約8年にわたる
日本各地での宣教活動のかたわら
日本アルプスを中心に登山を積極
的に行ない、日本に近代登山の種
を蒔くとともに日本山岳会の設立
に貢献した。英国帰国後の191
8(大正7)年、『極東の遊歩道』を
出版し、日本アルプスをはじめ日
本文化を世界に拡める役割を果た
した。のちに日本政府はこれを讃
え、勲四等瑞宝章を授与し、また、
日本山岳会はウェストン師が喜寿
を迎えたことを祝い、1937(昭
和12)年8月26日、上高地・梓川畔
の花崗岩露頭に、制作者の佐藤久
一郎と横有恒らによりウェストン

師のレリーフが取り付けられた。
そののち太平洋戦争が始まり、
その進展とともに金属類の供出の
矛先が上高地のウェストン師レリ
ーフに及ぶ危険を避け、撤去して
日本山岳会ルーム(虎ノ門不二屋
ビル)に持ち帰った方が良いとの
判断で、1942(昭和17)年12月
8日、茨木猪之吉画伯、田辺主計
交野武一ら3名に松本から穂苅三
壽雄と石工・金子栄蔵が加わり、
密かに岩頭からレリーフを外しル
ームに持ち帰った。

ルームに保管されていたレリー
フは戦災によりビルが焼失した際
損傷を受けたが、戦争が終わった
1946(昭和21)年、制作者であ
る佐藤により原型に近く補修され、
翌1947年、レリーフは当時、上
高地帝国ホテルの建設に当たつて
いた清水建設の浜野正雄の好意に
よりルームから上高地に運ばれ、
6月14日に当時の日本山岳会会
長であった松方三郎や藤木九三、大
町に疎開していた横有恒らにより
梓川畔の岩頭に戻された。

このウェストン師記念碑の復旧
式が、ウェストン祭の事実上の嚆
矢となった。同月22日には信濃支
部設立総会が開かれ、初代信濃支

部支部長に横有恒が就任。当初は
「ウェストン祭り」と呼ばれていた
が、第4回からは「ウェストン祭」
の呼称が定着した。

また、第11回の1957(昭和
32)年7月7日には、故秩父宮妃殿
下の式典へのご来臨があった。翌
第12回から信濃支部第2代支部
長・尾崎喜八による詩の朗読が始
まり、第25回の1971(昭和46)
年まで続いた。

以来、ウェストン祭は毎年6月第
1日曜日、上高地ウェストン広場
で開催され、1973(昭和48)年、
信濃支部アンナプルナー峰登山隊
隊員4名とシエルパが不幸にも遭
難死した年も絶やすことなく開催
されてきた。開催に当たっては日
本山岳会本部からの補助を基に、
松本市と協賛団体の支援により信
濃支部が主幹し、これまで安定し
て継続することができた。しかし、
昨年の第74回ウェストン祭は、年
初から始まった新型コロナウイルス
感染症の拡大による「緊急事態
宣言」の影響を受け、前日の徳本峠
記念山行は中止、碑前祭も信濃支
部役員を中心とした13名のみの参
加により、縮小開催を余儀なくさ
れた。(信濃支部総務委員長)

第75回ウエストン祭を縮小開催

青木保良

第75回となる今年、終息を期待した新型コロナウイルス感染症は収まる様子がなく、第4波の脅威下にあります。こうした中、今年のウエストン祭は昨年につき日本山岳会関係者のみによる縮小開催といたします。参加者は、熱や健康に異常のないことを確認した上で、消毒を徹底し、マスク着用、ソーシャルディスタンスを確保するなどの対策を徹底することとします。今年のウエストン祭への参加は、基本的には長野県内在住の信濃支部員とします。日本山岳会会員であっても、緊急事態宣言やまん延防止対策の対象地域からの移動や県境を越えてのご参加はご遠慮ください。

概要

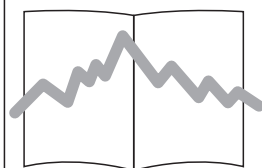
【徳本峠記念山行】6月5日(土) 上高地から徳本峠の往復日帰りとし、個別行動とします。島々宿からの徳本峠ルートは、島々谷の林道、登山道が地震、

豪雨により通行不能となっております。なお、当日、地元島々地区公民館主催による児童の徳本峠登山計画では、コロナ感染防止のため、徳本峠に行かれないよう別行動をお願いいたします。上高地でのウエストン祭本部は設けず、恒例の打合せ・夕食会は中止します。

【碑前祭】6月6日(日)午前10時、ウエストン広場ウエストン師レリーフ前にて開催。レリーフへの献花、松本市長のメッセージ、尾崎喜八の詩の朗読などを予定しており、短時間で衍ないます。午餐会は衍ないません。

【記念品】手拭い・ブローチなどの記念品は当日、頒布する予定です。日本山岳会ホームページでも頒布していたく予定ですが、多くの会員のご協力をお願いいたします。

(信濃支部ウエストン祭実行委員長)



図書紹介

楠田哲士編著

神の鳥ライチョウの生態と保全 日本の宝を未来へつなぐ



2020年12月
緑書房
B5判 288頁
4800+税

ここ数年、テレビ番組で生息域内保全の取り組みが紹介され、その保護への関心が高まりを見せてつあるライチョウ。

本書は国指定の特別天然記念物であり、絶滅危惧種であるニホンライチョウの保護について最新の研究成果を紹介した「ライチョウ保護大全」とも言える一冊である。全体を通して平易な文章で記述されており、ライチョウについて関心のある登山者をはじめとして、各地で展開されている「ライチョウ

ウサポーター制度」など、より踏み込んだ保護活動に参加する際の知識の導入には好適である。

編著は岐阜大学応用生物科学部准教授で「第19回ライチョウ会議ぎふ大会」実行委員長でもある楠田哲士氏。執筆陣は各分野でライチョウ研究の最前線で活動している70名を超える研究者で構成されており、これまで研究発表の場として回を重ねてきた「ライチョウ会議」で発表されてきた最新の知見が紹介されている。

主な構成は以下のとおり。

- 第1章 ライチョウの分類と生態
- 第2章 ライチョウの捕獲と保護の歴史
- 第3章 野生ライチョウの現状と課題
- 第4章 ライチョウの生息域内保全
- 第5章 動物園でのライチョウの生息域外保全

第6章 ライチョウに会いに行く

第1章ではライチョウの基礎的な生態の説明から始まり、第2章は日本人との関わりについて歴史・文化的な背景とともに説明している。第3章以降はライチョウの減少と保護活動の実際とそこでの問題点、さらにその改善のための手法について解説している。第4章はNHKなどのテレビ番組で紹介されている「生息域内保全」の取り組みについてより詳しく解説されている。また、各地での動物園で取り組まれている「生息域外保全」では孵化雛が死亡する例がよく報道され、その飼育の困難さが知られているが、第5章ではその原因解明のための生理学的取り組みについて一般人にも分かりやすく解説されている。

基本的には、読者が関心のあるどの章から読んでも理解できるが、通読することによりニホンライチョウの保護は捕食者対策以外にもほかの動物による食害、さらには気候温暖化の影響など、生息域の総合的な環境保護が必要であることが理解できるであろう。

私が所属する自然保護委員会でもライチョウ保護の一助となるよ

う、登山者の食べ残しを狙うテンなど捕食者からライチョウを守ることを啓発するポストカード(解説文は和英併記)を作成して各地で配布してきたが、引き続き登山者として取り組めることを念頭に、ライチョウ保護活動に取り組んでいきたいと考えている。

(谷内剛)

南島探検

安間繁樹著



2020年11月出版
あつる 344ページ
A5判 2500円+税

2019年度の「秩父宮記念山岳賞」の受賞者である安間繁樹会

員による沖縄県・西表島に関する新著で、2017年に上梓した

『西表島探検』(同版元)の続編とも言えるもの。サブタイトルに「西表島の沢を歩きつくす」とあるように、「西表島のすべての沢を歩きたい」と一念発起、若いころ歩いた島の沢を、60歳を過ぎてから一つ一つ歩き直した成果がこの一書となった。

『西表島探検』(同版元)の続編とも言えるもの。サブタイトルに「西表島の沢を歩きつくす」とあるように、「西表島のすべての沢を歩きたい」と一念発起、若いころ歩いた島の沢を、60歳を過ぎてから一つ一つ歩き直した成果がこの一書となった。

第23回「秩父宮記念山岳賞」の推薦募集について

秩父宮記念山岳賞審査委員会

第23回「秩父宮記念山岳賞」の推薦(他薦に限る)を次のとおり受け付けます。事務局まで資料をご請求ください。当会のホームページを活用される方は、推薦募集の詳細を掲載しておりますので、推薦要項・所定様式(ダウンロード可能)などをご参照ください。多数のご推薦をお待ちしております。

なお、本賞は公益目的事業でありますから、受賞対象者を本会会員またはグループに限定していません。

- ◎対象分野 登山活動／山岳に関する文化的活動、学術的業績
- ◎提出先 日本山岳会内 秩父宮記念山岳賞事務局
- ◎締切り 令和3年8月31日(火)

本会報の2020年1月号(896号)で著者が綴っているが、西表島に魅せられたきっかけは、1965(昭和40)年3月、「西表島で未知のヤマネコ発見」という衝撃的なニュースで、当時20歳の著者は同年7月、早速西表島に渡る。そこから紆余曲折を経たのち、動物生態学者として50年にわたる「島通い」が始まったのである。

西表島の魅力は、海を渡って行くので、ちょっとした遠征気分になれること。著者なりに定義した沢は200を超え、1000余の滝があるが、いずれも迂回できること。終日水の中を歩いても、真

冬に野宿しても凍傷になつたり、凍死しないこと。自然の水が豊富で、どの沢でも安心して生水を飲めること。深い森で南方系の生き物たちとの出会いがあること、などが挙げられると言う。

本書は第1章から第4章まで、東海岸、北海岸、西海岸、崎山半島と地域別にまとめられ、それぞれの海岸に開口する川と支流ごとに紹介されている。ほとんどがカタカナ地名で、まるで海外の沢を遡行しているような気分になる。その沢名の表記にも随分苦労したようで、様々な地図や文献に当たり、島の人々に尋ねて可能な限り

の沢名を記入したが、無名沢が多過ぎるため、仮の名前が付けられているものもある。

著者は「まえがき」で「私はガイドブックとして本書を書いたつもりはない。紀行文またはエッセイだと考えて欲しい。私はあくまで、五〇年間に渡って見てきた、西表島の自然と歴史、人々の営みを書き残していきたいのである。」と綴っている。しかしながら、それぞれの沢には詳細な地図と写真（モ

ノクロ）が添えられており、巻末には「行動記録」と「西表島の沢一覧」があり、次に続く登山者にとつて貴重な参考資料となっている。

「これからも西表島の自然と、そこに生きる人たちを見詰め、西表島があるがままに記録していきたい。80歳を過ぎたら総集編を書きたい」と言う。著者の西表島に懸ける情熱は、衰えを知らないようだ。

（節田重節）



令和3年度第1回（4月度）理事会 議事録

日時 令和3年4月14日（水） 19時

00分～21時30分

場所 集会室およびオンライン

【出席者】古野会長、野澤・山本・

坂井各副会長、永田・古川・

萩原各常務理事、安井・清

登・清水・飯田・柏・近藤・

各理事、石川・黒川監事（山

本副会長、萩原常務理事は
審議事項後に出席

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・令和2年度の特定資産（固定資産）の取り崩し処理の承認の件

令和2年度の東京多摩支部海外登山遠征隊特定資産および図書管理特定資産を取り崩すことを審議

した。（賛成11名、反対なしで承認）

2・寄附受け入れの承認の件

高尾の森づくりの会への寄附1件について審議した。（賛成11名、反対なしで承認）

【報告事項】

1・正会員35名、準会員5名の入会の承認をした旨、報告があった。

（古野）

2・14件の寄附金受け入れについて報告があった。（古川）

3・寄附金受領に伴う特定資産の積立処理および寄附金収入の指定正味財産への振替処理について報告があった。（古川）

4・YOUTH CLUB委員長が、中山茂樹会員から松原尚之会員に交代した旨、報告があった。

（野沢）

5・山の日事業委員長が、成川隆顕会員から久保田賢次会員に交代した旨、報告があった。（清登）

6・4月10日に支部連絡会議が開催された旨、報告があった。（永田）

7・支部事業委員会の「特別事業補助金」の申請額の決定について報告があった。（坂井）

8・令和3年度上高地山岳研究所管理人雇用契約と開所期間、運営内容について報告があった。（安井）

9・4月10日に開催された第1回全国山岳古道会議と各支部の現状について報告があった。（近藤）

10・エベレスト登頂50周年記念フォーラム、写真で振り返る日本人のエベレスト展の開催について報告があり、フォーラム開催については再検討することになった。また、『写真で振り返る日本人のエベレスト』発行の報告があった。

（飯田）

11・YOUTH CLUB委員会の予算について、現状の報告があった。（古野）

12・北・南・中央アルプス、八ヶ岳などの山小屋の現状について報告があった。（柏）

13・山岳振興基本法の構想について報告があった。（清登）

14・北島英明会員の遭難事故について報告があった。（古野）

15・次期役員について報告があった。（古野）

16・糸魚川市フォッサマグナミュージアムからイベント後援申請があり許諾した旨、報告があった。（永

田) 17・同好会JAC01会が解散した旨、報告があった。(永田)
 18・「山」4月号について報告があった。(節田)
 19・「山 YOUTH」が発行される旨、報告があった。(永田)
 20・4月28日に臨時理事会を開催する旨、報告があった。(古野)

ルーム日誌 4月

2日 記念事業委員会
 6日 常務理事会
 8日 二火会
 9日 図書委員会
 12日 スケッチクラブ
 13日 フォトクラブ
 14日 理事会 休山会 山想倶楽部
 16日 スケッチクラブ
 20日 会報編集委員会
 21日 つくも会
 26日 緑爽会
 4月来室者 101名

会員異動

物故

金森繁二郎(3637) 21・4・28
 青島秀夫(5211) 20・12・31

松屋信之(6343) 21・3・25
 長田正行(6744) 21・4・13
 岩垣敏宏(6829) 21・4・21
 黒木邦夫(6877) 21・4・18
 奥田晃司(10213) 21・4・5
 和田博文(11558) 21・4・3
 森田武男(13395) 21・3・29
 退会
 市川義輝(9199) 東京多摩
 石川正昭(13542) 山梨
 齋藤喜市(14169) 福島

I N F
O R M

インフォメーション

A T I
O N

◆第10回アツモリソウ保護活動の募集案内

絶滅危惧種のアツモリソウの咲く時期に保護活動(主に除草作業)に参加しませんか。

共催 本部・自然保護委員会 東京多摩支部・自然保護委員会

日時 6月13日(日)～14日(月)
 集合 富士急行線・河口湖駅5番

小泉 賢(14727) 東京多摩
 竹内浩一郎(14919) 広島
 三好はつえ(14920) 広島
 山下幸祐(15117) 東海
 寺西幸代(15193) 四国
 仲川侑子(15473)
 國吉敏子(15521) 広島
 永浜洋光(15883) 宮城
 野田紀子(16204) 岐阜
 服部晋吾(16530) 東海
 丹羽敦士(16556) 広島

行程

「天下茶屋行」バス乗り場 9時30分
 宿泊組Ⅱ三ツ峠山荘周辺にて保護活動後、同山荘に宿泊。日帰り組Ⅱ13日のみ、保護活動後に往路を下山(バス便はなく、登山口からタクシーの利用となります)。宿泊組は、14日の左記2つの下山コースの

どちらかを選択してください。

Aコース…往路を下山、三ツ峠登山口10…20発のバスに乗車

Bコース…府戸尾根から富士急行線・寿駅へ下山

参加費 宿泊組Ⅱ1万円(宿泊費・協力金) 日帰り組Ⅱ1000円(協力金)

募集 10～15名(宿泊者)

申込み締切り 6月5日(土)(メール・電話にて)

参加申込み先・問合せ先 小河今朝美

☐magunoria.saku1234@gmail.com 携帯080-

34200-1214

申込時の記載必要事項Ⅱ氏名、性別、年齢、会員番号、支部名、携帯番号、住所、山岳保険加入先、メールアドレス、緊急連絡先(氏名、続柄、電話番号) 宿泊または日帰り、宿泊組は翌日の下山コース(AまたはB)を記入してお申込みください

*参加申込み者には後日、詳しいご案内を送付いたします。

◆白神山地ブナ林再生事業と自然観察会

青森支部

世界遺産・白神山地のバッファ
ー・ゾーン周辺の生育不良杉林地
をブナ林に再生するための除伐や
植樹などの作業、および原生ブナ
林(クマゲラの森 観察会を行なう
寝袋必携。テントはこちらで用意
可。食事希望者は実費で用意可
(小雨決行、ただし荒天、コロナ感
染などでの日程変更、中止の場合
あり)。

日程 6月19日(土)～20日(日)

集合 19日8時、JR弘前駅城東
口、および8時45分ピーチ
にしめや、および10時30分
奥赤石林道ゲート

解散 20日、15時奥赤石林道ゲ
ート、17時30分弘前駅送迎可
経費 500円(傷害保険料込み、
当日徴収)

定員 30名

申込み ハガキかFAX(01
72-44-7237)かメ
ールで福士和基宛 6月9日
までに(〒036-815
4 弘前市豊原2-13-14
f.kazumoto@gmail.com

◆梅海新道全線開通50周年 山
開きの案内

日時 6月6日(日) 午前7時より
場所 糸魚川市親不知コミュニ
ティ広場

行事 山開き(安全登山祈願神事)
および白鳥山記念登山

山開き終了後、坂田峠に移動し
て登山開始となります。記念登山
からの参加も可能です。その際は、
8時30分に坂田峠にお集まりくだ
さい。各自のペースで山頂を目指
します。参加者はマスク着用など
の感染予防対策をお願いします。

*申込み不要 小雨決行

問合せ先 梅海岳友会・靄本修一
TEL 025-562-4309

◆千葉潔 山岳画展

安曇野山岳美術館
半世紀にわたって山を描き続け
る千葉潔の山の絵展です。

会期 4月16日(金)～6月30日(水)

10時～16時(休館は毎週木
曜日)

会場 安曇野山岳美術館第2展示
室(安曇野市穂高有明36

13-26 TEL 0263-83
14743 mt.museum1
@jcom.home.ne.jp)

入館料 一般・大学生600円
中学・高校生300円 小

学生以下無料

◆日本山岳画協会85周年記念展

日時 7月4日(日)～10日(土) 11時
～17時(初日は正午から、
最終日は16時まで)

会場 東京交通会館B1ゴールド
サロン(東京都千代田区有
楽町2-10-1 TEL 03-3
215-7933)

◆杉山修 山の版画展

日時 7月11日(土)～8月1日(日)

11時～20時(初日は正午か
ら、最終日は16時まで)

会場 モンベル御徒町店4Fサロ
ン(台東区上野3-22-6
コムテラス御徒町 TEL 03-
5817-7891)

問合せ 杉山修 TEL 090-054
40-4552 sugiyama@
osamuhanga.com

会期中に木版画の彫りと摺りの
実演を行います。



◆編集後記◆

●私の友人の登山ガイドで、本職
はお寺(曹洞宗)のご住職という人
物がいます。彼と四方山話をして
いた折、「登山と禅は相通じると
ころがありますね」という話にな
りました。確かに、黙々と山道を
歩いたり、山頂に端座して山の気
を感じたり、豪雨や吹雪の下、テ
ントや雪洞でじっと耐え忍ぶ時間
などは、「只管打坐」と言われる座
禅の教えに近いかもしれません。
●達磨大師の「面壁九年」には遠く
及びませんが、雪洞の中で雪の壁
と向き合いながら、「面壁九日」ぐ
らいは耐えられそうです。それに
しても、コロナ禍からの脱却に明
るい展望はありませんね。「自助」
努力で耐え忍び、ワクチン接種の
日をひたすら座して待て、という
ことでしょうか。(節田重節)

日本山岳会会報 山 912号

2021年(令和3年)5月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 古野 淳
編集人 節田重節
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社